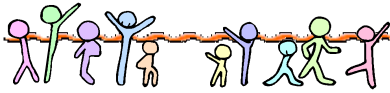


ぼうさい



発行 平成27年12月10日 第12号
NPO セーフティネット ぼうさい
〒948-0003
十日町市本町 6-3
連絡先(代表 尾身誠司)
電話 025-752-7353
FAX 025-750-3670

E-mail tbk119@jeans.ocn.ne.jp

平成二十七年度を振り返って

代表 尾身誠司

今年はい十日町地域に大きな災害はなく比較的穏やかな年でした。しかし、全国的に見れば異常気象による集中豪雨、台風は海水温の上昇により勢力を維持し、十八号は茨城県、栃木県、宮城県に被害をもたらしました。気象庁は「特別警報」を発令し注意を呼びかけ、初めて効果を上げたように見えます。避難勧告、避難指示が適切に発令されたかは別の問題であり、自治体がいかに住民の命を守る対策が講じられているかは課題です。十月十二日、十三日「越後妻有防災ネット連絡協議会」で常総市にボランティア活動に行ってきました。平野で起こる水害と山間地で発生する土砂災害の対応は当然違い、当地域は信濃川の洪水が心配されて来ましたが、住宅

地を襲う被害は少なく、大雨による土砂災害が心配されていません。

平成二十三年七月新潟・福島豪雨で今までに経験したことのない被害を受けました。昨年のリーダー研修会は「特別警報」今年度は「土砂災害から身を守る」をテーマに行われました。「土砂災害ワークショップ」を各地で開催し「こたえを感じています。一般的には「講話」により早めの避難を呼びかけたり、避難時の心得をマニュアルに従え伝えるくらいです。NPOはDIGの手法で「土砂災害ワークショップ」を実践してきました。地域の事を知っているのはそこに住む人たちです。昔からのことを知っているお年寄り、インターネットに詳しい若い人からの情報、女性でなければ気づかないこと等、ポストイットに書きこみ、い

ろんな意見が出されます。

それに対する備え、対策を皆で考えます。グループごとに発表する結果を自分のことと、とらえ、真剣に聞く皆さんの顔は納得した顔です。一方通行の「講話」、双方向の「ワークショップ」を感じた今年でありました。やはり基本はDIGを実施し「防災マップ・地区防災計画」を作成しスタートするのが順序のような気がします。

「子供たちを守る防災教育」、言葉だけで空回りしているのが気になっているのも事実です。今後この問題を「自主防災組織」と関連し対策を考え「災害にも強い妻有地域」を目指して活動を続けたいと思います。

常総市水害復旧ボランティアへ

高橋敏昭

十月十三日常総市へ水害復旧のボランティアへ行ってきました。社会福祉協議会職員三名、十日町青年会議所会員三名、当会から尾身代表と私の二名十三名の参加でした。

十日町を六時に出発十時頃到着、バスの車窓から町を見ても注意してみないと水害の爪痕は分からない位ですが、テレビ中継で何度も放映されていた孤立したスーパーマーケットなどが見えてくると、「ここは被災地だ」と改めて認識しました。

平日でしたが、ボランティアセンターには我々の他にも何組かの団体が来ていました。

我々は三組に分かれ現場に向かいました。自分は社協の職員四人と組み、担当は広い敷地を持った民家で、壁には七十センチ

〜八十センチ位の水のあとがあり、庭や家の周りには五センチ程のヘドロが固まっており、それを取り除くのが自分達の作業でした。日頃農作業等はしているのですが、かなりきつい作業になりました。

休憩中、周りを見ると自分が夢にまで見ていた、大型カメラのレンズが目に入ってきました。主人にその事を聞くと近くから泥まみれになったボディーを無造作に探して来ました、もう少し高い所があれば助かったのにと残念そうに話していました。

カメラだけでなくエアコンの室外機、冷蔵庫、お米等々多くの物が浸水してしまっていました。ご主人も奥さんも平静に振る舞っていましたが、このトラウマが解消されるには永い時間が必要なんだろうなとそんな事を感してました。

被害の甚大さに比べれば自分達の行った事は小さい事ですが沢山の人が関わる事で、被災者の方々の、そして被災地の復興の手助けに少しでもなれば良いのかなと思っています。



「常総市災害ボランティア」
活動の様子(上、右)

市民総参加の防災訓練を

根津 征吉

災害に強い街というのとはどういふ街をいうのでしょうか。それは「市民の力によって災害から生命身体を守り切ることができる街」であろうと考えます。

大雨や積雪に伴う災害の発生が懸念される状況にある時は、それぞれの地域において自防災組織の皆様の巡視などにより、いち早く危険を察知し、的確な判断のもとで早期の避難を促すことができれば生命身体は守ることができます。

気象状況などに応じて市内各所でこのような動きが自発的に起これば「災害に強い十日町市」になります。そのためには、多くの市民がいつどんな災害が発生するかわからないという危機意識を持ち、それに基づく自主防災活動などの備えがあつて

初めてなしうることです。

十日町市では毎年十月に県・警察署・消防署・自衛隊を始めとする行政機関、電力・通信機関、医療機関、ボランティア組織及び開催会場近隣の住民の皆様など多岐にわたる参加を得て、防災訓練が行われています。

参加各機関が独自の任務や他機関との連携などについて再確認され、住民の皆さんは避難所開設の流れを確認するなど大きな効果を上げています。

半面、参加しない多くの住民や町内会には効果が及びません。防災訓練の目的は「災害に強い十日町市を創る。」ことにあります。

くどいようですが「災害に強い十日町市を創る。」ためには多くの市民が災害に対する危機意識を持つことです。

十日町市の自主防災組織の結

成率は一〇〇%近いものとなっており、定期に様々な工夫した訓練を実施している組織もある一方で、全くといってよいほど活動のない組織もあります。

「災害に強い十日町市を創る」ために現在行われている防災訓練に、全町内会が安否確認及び、指定避難所への移動を促すなどの訓練も加えてほしいと考えます。そのことにより多くの市民が災害の対応のありかたについて考えるきっかけとなり、さらに「災害に強い十日町市」となるものと考えます。



10月18日、「十日町市総合防災訓練」
(上野小学校グラウンド)
市民による消火訓練の様子

「また参加しよう」と
思わせる訓練に

阿部 正子

自主防災組織への訓練指導が、十日町市より委託を受けて、今年で四年目になります。十一月三十日まで、十日町市全域訓練実施回数四十一回、二二三五名の方が参加して下さいました。まだ残り四ヶ月ありますので数字は伸びると思います。消火訓練、救急訓練は、毎年多くの依頼がありますが、今年は加えて、水害に関する防災講話を行ってほしいという要望を受けました。毎年六、七月に開催される、「リーダー研修会」も二年続けて土砂災害に関する講話となりました。当地が、大きな水害に遭ったので、関心が強まったのでしょうか。九、十月、特に土日に訓練は集中します。一日三会場の訓練を指導する方もいます。

指導する側にとっては何十回のうちの一回、しかし、参加する住民の方にとっては一年に一度の大切な訓練です。貴重な時間を割いて会場まで足を運んで下さるわけですから、参加してよかったと思える訓練にしたいと思います。まず、訓練の内容をよく理解もらうこと。何をすればよいか分からないでは、やる気も半減してしまいます。救急訓練では、口頭で手当ての方法を伝えます。その際、「心肺蘇生」、「胸骨圧迫」といった専門用語は、説明するようにしています。自分では理解していても、初めて参加される方にとっては何のことだか分かりません。指導に出て、参加者の方よりお叱りを受け、初めて気づくことがあります。改善を続け、分かりやすい指導を心掛けています。

濃煙体験



防災ワークショップ(DIG)訓練



《編集後記》

江戸時代「安政南海地震」により紀伊半島などで大津波に襲われた。「稲むらの火」の逸話とともに十一月五日は「津波防災の日」として知られています。

「この日が「世界津波の日」に制定されるようです。

大津波は東日本やインド洋沿岸諸国、ペルー、チリなど多くの人命を奪い甚大な被害をもたらしてきており共通の課題なのだと思います。

日本は災害の多発する国ですが、助け合いの心も強い国です。日本人の共助の精神が、世界の防災意識向上に追い風になったのかもしれません。(正)